

令和7年度 学校園評価シート

(様式2)

学校園名	加古川幼稚園
------	--------

1 教育目標 心豊かに学び合い、育ちあう子どもの育成

2 基本方針
 幼児の一人一人の特性や発達を捉え、安心安全に園生活を送るための適切な援助や環境構成を工夫する。また、特に年長児は就学を意識しながら自立心、学びに向かう力や協同性を養い、小学校や地域との関わりや体験活動を通して健康で主体的に行動できる幼児の育成を目指す。

3 指導目標
 (1)心も体も健やかで 明るい子 (2)思いやりがあり 心の優しい子 (3)様々な経験を通して 主体的に遊ぶ子 (4)自分の思いを伝え 素直に表現する子 (5)感じる心 考える力ある子

評価基準 A:できている B:だいたいできている C:あまりできていない D:できていない

重点目標	評価項目	達成状況	成果	課題と改善の方策	自己評価の適切さ (関係者評価)	達成状況
基本的な生活習慣の確立と情緒の安定を図る	◎心も体も健やかで 明るい子 ・挨拶や基本的な生活習慣の確立をめざし、発達段階に即した生活を送ることができていたか。 ・幼児の体調、けが、事故などに関して常に敏感に対応し、保護者と連携を取りながら適切な処置を行っていたか。 ・指導計画に基づいて、幼児が主体的にかかわりたくなるような環境構成、遊びを深めていくための工夫をしたか。 ・一人一人の発達段階に応じた対応や視覚支援等を行うことで自信をもって行動できるよう支えたか。	A	・職員が率先して挨拶をしたり、保護者へ丁寧に対応することを心がけた。また、個々の発達段階や特性を正しく捉え、まずは情緒の安定を図る、必要に応じて1対1対応や“分かる”“楽しい”経験を積み重ねることで、幼稚園に笑顔で登園する姿が多く見られるようになった。 ・幼児の姿と指導計画がうまく合わないこともあったが繰り返し保育を反省し、幼児が楽しめる保育を日々考えていったことで、少しずつ幼児の姿を見て遊びを捉えることができてきたと感じる。 ・発達がゆっくりな幼児に合わせて視覚支援や幼児が落ち着いて部屋で過ごせる場所を用意したことがクラス全体の理解にもつながった。	・食事や排せつ、衣服の着脱等、経験不足(年齢に関係なく、全て親がしてしまう)など家庭教育の低下が気になる。保護者と一緒に一人一人の発達課題を明確にし、スモールステップで具体的、継続的な支援の必要がある。 ・幼児のしたいことや願いに沿い就学時に必要な経験や遊びもできるように工夫してきたが、職員同士の話し合いを深め、より積極的に環境の再構成を行っていく必要がある。またこども園になることによって保育園から幼稚園からの進級児や新入園児が主体的に遊べるように学年にあった環境を整えていく必要がある。	・一人一人の課題や発達に合わせて指導を工夫されていることがよく分かる。 ・幼児期に獲得すべき基本的な生活習慣を身に付けている。来年度は0歳児から通園するとのことなのでより家庭と連携しながら進めていってほしい。	A
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」を視点に、保育計画、実践、記録、評価を行い、幼児が主体的に遊びを展開できるような環境を構成する。	◎様々な経験を通して 主体的に遊ぶ子 ・鬼ごっこやドッジボール等戸外で思いきり体を動かしながら、簡単なルールを守り集中して取り組めるよう支え、充実感や満足感を味わえるようにしたか。 ・様々な行事や活動を通して思わず遊びたくなるような環境構成や遊びの動線を工夫することができたか。 ◎感じる心 考える力がある子 ・一人一人の育ちに応じた認め、励ましを行い、遊びや興味に応じた環境を整え、行事や様々な遊びへの意欲を高めたか。 ・幼児の思いや気付きを周りの幼児にも広めながら話し合ったり、考え合ったりする機会を多くもつことで幼児の学びを充実することができたか。	A	・発達段階や季節に合った遊びや行事が経験できるように、計画を立てる工夫をした。 ・幼児が興味あることや幼児から出た遊びを行事につなげていくことを心掛けことで幼児が自分たちの行事であるという意識をもって意欲的に取り組むことにつながった。 ・自分達で遊びを進める中で困ったことがあると教師が間に入って話し合いの時間を設け、ルールを再確認したり、新しいルールを作って遊びを進めていった。3学期になると自分達で解決し、みんなで楽しめるように考え遊びを進められるようになった。 ・一人一人の育ちに応じた認め、励ましを行い、遊びや興味に応じた環境を整え、行事や様々な遊びへの意欲を高めたか。 ・幼児の思いや気付きを周りの幼児にも広めながら話し合ったり、考え合ったりする機会を多くもつことで幼児の学びを充実することができたか。	・主体性の捉えが難しい。特に5歳児は自分達で遊びを進められるような力を付けていくことで、就学後の生活や学習の場の基となる。来年度はクラスの人数が増えることでの戸惑いも予想される。育ちの連続性を配慮しながら個の育ち、集団の育ちを明確にして、例年通りではなく、目の前のこども達にあった保育内容に取り組めるように、教師自身の自己研鑽が必要である。 ・教師自身が身の回りの変化に気付く心、感じる心をもって物事に関わる必要でこども達にも届いていく。	・様々な遊びや活動が経験できるよう工夫されている。 ・広い園庭で思いきり身体を動かせることの素晴らしさ、有難さを感じる。来年度のかこいるこども園にはたくさん園児が来るが、体を使った遊びなど引き続き計画していってほしい。	A
幼児の特性や発達段階に応じた教育的ニーズを把握し、一人一人に応じた支援・指導を行う。	◎思いやりがあり 心の優しい子 ・自然や生き物に対する感性を持ち、心や体をつかかって表現したり、遊びに取り入れたり出来るよう保育実践や教材研究に努めたか。 ・異年齢児とのかかわりや飼育栽培物の世話を通して、あこがれや思いやりの気持ちをもつて接することができるような機会を設けたか。 ◎自分の思いを伝え 素直に表現する子 ・善悪の判断、思いやりなどの道徳性を培う上でもモデルとなり、教師自身が幼児の心を傷つけたり、人権を損なったりするような言葉や態度、かかわり方をしないよう心がけたか。 ・幼児の気持ちに共感したり、一人一人の幼児の思いを把握しありのままを受け止めたりして内面理解に努め、思いを素直に表現できるように関わったか。	A	・特性や発達段階に合う支援の方法を探りながら日々の保育に取り組むことを心がけた。個別の対応を必要とする幼児が増え、クラス運営の難しさを感じることも多いが、園全体でねらいや育ちを共有しながら保育に取り組んだ。 ・幼児が今頑張っていることに対して認めの言葉を多くかけたり、できたことには一緒に喜ぶことで友達同士でも励まし合ったり認めあったりする姿が見られるようになった。欠席の友達を心配し、登園した際には声をかけたりといい関係を築くことができていた。 ・教師が意識して誘い掛け、園庭の小さな虫や植物等に目を向けられたり、世話をしたりできる環境を一年を通じて支えていったことが自然や生き物に興味や関心を示し、親しみをもって関わる姿につながった。	・好きな遊びや生活の中で、もっと異年齢の関わりを多くもつことができると、互いの刺激につながるのではないかと。 ・言葉で上手く伝えることができない時に友達とのトラブルの原因を理解するにはその場を教師が見ていないと分からないため、今後も職員間で連携を図り見守る必要がある。 ・幼児の思いに寄り添いすぎて止めるところをうまく止められずメリハリをつけられない時がある。その時々での時間設定や頑張った後の活動を見通しをもって提示していこうと考える。	・幼児の発達特性や学びを捉えて丁寧に関わっておられる様子が伺える。 ・異年齢児が楽しく活動しながら互いを思いやったり、あこがれの気持ちをもって遊べるような遊びを教師が意図的に計画していることがよくわかった。	A
地域・家庭・学校園が連携し、地域総がかりの教育を推進する	・地域との連携に努め、季節の行事や苗植え体験、いも堀り体験等でのふれあいを通して様々な方への感謝の気持ちをもてるよう支えたか。 ・ユニット会議や青少年育成連絡会議などの内容を共通理解し、地域、小、中学校との連携や就学への憧れをもつ機会となるよう工夫できたか。 ・特別支援ルーム児や気になる幼児を中心とした幼児の関わりや育ち、園での学びについて小学校との連携を図ることができていたか。	B	・ユニット連携で相互参観への回数が増えたり、今年度は5年ぶりに交流給食の実施ができた。また、支援学級との交流会や研修の場で情報共有だけでなく、小学校での自立活動を中心とした授業の展開を知るきっかけとなり、就学までに身に付けておきたい力につなげることができた。 ・運営協議員の方や地域の方の名前を子ども達と共有することや、行事に参加していただいたり、来園していただいた時に挨拶をしたりすることが感謝の気持ちにつながった。	・参観に参加するだけでなく、少しの時間での振り返りの場を確保し、互いの教育・保育について正しく理解できるきっかけにしたい。年度当初に教育家庭や教育・保育の方向性について話し合い等、連携から接続へつなげていきたい。 ・来年度は園舎移設されるため、小学校との距離が遠くなるためより連携の工夫が必要である。 ・スクリーン配信などを小学校や地域の方へ定期的配布し、幼稚園教育をもっと知ってもらえるようにしたい。	・各小学校との距離が遠くなるが、教師間の連携からでも幼児のための接続を引き続き進めていってほしい。 ・新しい園で周りの地域とのかかわりをしっかりもち、地域に根差したこども園を目指してほしい。	B
教師の資質向上・研修の充実を努める	・各学年の遊びや活動の連携や学びの連続性、気になる幼児のことについて話し合い、互いの保育に活かすことが出来たか。 ・小学校につながる学びについて考慮したクラス便りやドキュメンテーションを作成し、スクリーンでの配信等を活用しながら保護者への啓発にも努めたか。 ・保護者からの意見や上司からの指導を真摯に受け止め、反省し、課題を見つけ、フィードバックしながら保育に努めたか。	B	・スクリーンで遊びのあしあとなどを定期的に配信することができた。保護者には普段の園の遊びや遊びの意味、学びについて知ってもらえるきっかけとなった。 ・保護者から出た意見は自分の中で留めずすぐに園全体に共有し、どういった対応や伝え方をすればいいかと相談し、その時々に応じて担任だけでなく主任教諭や園長も混じえて対応したりしたことが信頼へつながったと感じる。	・職員の経験年数に差があり、自分のクラス運営で精いっぱいであったり、こどもの育ちや興味の合うねらいが明確でなかったりする。日々の業務が忙しいが、保育を語り合える場をもう少し確保し、教諭自身が心に余裕をもって保育に楽しめるような環境作りを務めていく必要がある。 ・園全体の幼児の育ちを意識して、どの保育者もそれぞれの立場で幼児や他の保育者と関わっていくことが必要であると思う。	・家庭への発信も今の時代とても大切だと考える。様々な方法で園の様子を伝えていってほしい。 ・若い教師の学びの場は重要だと考える。これからも職員全体で情報を共有し、保育の質を高めていってほしい。	A